扶桑拾葉集

十一

和書門
八五五二 號
九四 函
九 架
三五 冊
類 號 函 架 冊

内閣文庫
和書 類
八五五二 號
三五 冊
二〇四 函
七 架

内閣文庫
番號 和 8552
冊數 35（13）
函號 204 145

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

扶桑拾葉集巻第十一

目録

千五百番歌合勅判序　後鳥羽天皇
遠島御歌合序　同
新古今和歌集跋　同
時よりは御[illegible]文　同
顕註密勘跋　藤原定家
宮河歌合跋　同
[illegible]の[illegible]文　同

明治十二年購求

巻十二目

長綱百首乃あとにしるしつけ侍る辞　　同

和歌初心抄序　　同

人のもとへ遣はせる文　　遠江禅尼

東関紀行　　源親行

斧柯序　　源通光

七十首歌合跋　　藤原光俊

江長歌合序　　藤原為家

寶治歌合跋　　同

古今著聞集跋　　橘成季

扶桑拾葉集巻第十一

参議従三位兼行右近衛権中将源朝臣光圀編集

千五百番歌合勅判序　後鳥羽天皇

とうくさゝけまつりし後の百首をつかひてあまた卅巻
の歌合をしるしてあまたの人々に判しけるうちに二巻
をわれにおほせてわかちくはへよとありし
ときよしとうたの勝方をさためはへることゝも
難しりとかくいふへき色もおほつかなく侍り
次左右のよしあしは文字はかりとはかきてなしとよ
侍んうたに様かはりたるにや判のことは歌

日本政府図書

一首しゝうたみやうに三十一字侍りて句
れかみしもに勝劣れ字さゝまとゆるへし
負になり

遠嶋御歌合序

同

そもそも歌の判することは道よ絶くゆ
るさくれるゝ者を撰て難波のよしゆ
しを分ちまされ海乃かみにあさに
を定し也題乃和歌乃奇ゞまさり二乃手
示一字乃みしるなはしめとこへらく桑

乃門より今三百九十余乃はしめ玄同みち
秋ハ留乃渚河乃流をくむ事ありしわ
歌乃浦さうしと勝て十年あまりゝ六年
乃春秋をくれつゝ更に此道をもてあそ
ねよはあり従とも従二位家隆ハ和哥所の
流新古今乃撰者也八十餘乃命乃露いま
るあつし野乃ゆ場てしまてゝて稀
てかれを我しくらつ今一家思ふ乃
ひとらふはあつさしきたれくのまうるをた
くへむとも良乎是よりつく府にも章
乃そよりの手付くゝれをいつゝしかく

十躰の歌を定しあけて書けるにくらゐ．
人のさまひろうすりとよいはれい．まさの相
けよ妙く六儀のそいにはすぐみうてかしこし
されまいり．悪みの行かりとあしこの紫式部
ありしんまり亭悼多うまれ出らとかゝれる
執心の障をのもひとりにそもん．人まいとまた
つくりそうへつもかん次．此歌愚老ともしく．家
隆ふあへるてし道まそむきしるまたるく
きょうもあり躰としいそのかこみらともかし
年をへ侍てふりはすまを是とはうへつて．称
八代集の歌をむむくしも同しらえん分ししつい．

おもひしもあかさなかくにし．猶あおこうしかある
すゝえんやらうきよの人くらの歌の中より
も．十餘年のあひたのはゝ一首も関及さ
れはゞそへらん同歌をとりそえんむもとらんこう
めかくゆく故．ちうのこわしすち十のようの
老巻毛としいつくとをみれすそんゝみたゆてうこそ
ありみゆくさすうあてくうこれは．お為て註
しはし

新古今和歌集跋　同

今此新古今集ゑいまし元久ともしの和哥

所乃筆て給へなるハ今の哥をあつめ給へ
しめらく甚うし人々はうけえうて定家卿よりも
ふ乃うゑ家にハあるへからぬ物やし卿みそ
ちあまりの世俗をさへいそれいとえあふ
むへうてハあつて殺(?)して静(?)て是をえらひて
乃風情あるにもあらぬにもよきかきまな
くれよろこ人やうるハやしれも積りくして
集ちる所乃哥あまちゝ也殺の多かりけれはま
卿ハ哥こしてりいうにつかしてあし次ゝまれ
身につしらる哥をいれあそまゝ二十首てあま
紅のま道てしあゆる白ふ深しといへるにいうそ

哥集乃やつれとうつへりしえさらへへこれをよみてむかし
うてるは風やくしうる撰し首ハ拾遺ならへの萬葉の
うしとかさしを風うけいはさく乃門月ふかうる
いはいりへすちへ杜乃猶あかうらあをとこいまへりへ
し首よみ集をかつをりまいちいなあかいあして
あつきハいとまへかしく六人をかしてをへしと
いつし拾遺不遺不見あり勅して假名の序と
そらし先そりハ則此集の詮とさんまうくれ
をとを撰せし先ハかすの序とかきまつりけるある
へうよあすゝけよすくくすへての哥あし
愚詠乃数をあつとあつめあるとすさるのこ隠

すまへの哥の中に、かきあつめておなじ哥むかしもちとせへ
ひてくるは巻ごとに、ちりはしよりしの集をとどめ
へこよいあつ録をも、定りあつまあみるへいは
くれたくへし、阿弥陀の鳥は稽古をも因縁り。
やへかれは乃たの足りもんきんもん覚をいはれ
忘りあつこへりこへてくまき利ろ世に乃とせ
けるも

瑞すまは乃御姉へ　　同

これは法花経をみちあかれ由りもせく覚兎
をいはいのにたしいふあんをかりなりといそかしり　百

みつ一すじは六乃よのまうり念まりあそへられて
まえんごてけりとめくしてあるいは六乃世のえちあ
さくらさすれしてあらんすまん。あかよつ一かる
しそむよはごうこしをあらむはへりれは。
ちうやと思へしぞれはわか身もあくせんさん
くさくごちわあくてうりにゐりしてそれさか
とのましはいせんをとつ。ありて身にさすまうせん
ちんもなくするさてはよしくあくゆうりもゆく
ゆへむすけりさごろ乃しもの世てられしにあり。
ゆるさもあらむよはがしうむ乃よはさす揚
ぬかんは又二てて神事佛事ゆあくなどこそれしくる

つかうまつりをかりまかりけりしてあらまし南都
そうわかれしはをつかうまつりてくれんそうまん
事のもとをしかも御いのまゐら御あるへうこ
のやうは後白河法皇の御秘あかせて秘
しくいかにすへしとゆくわかりふかくし
から井をさうのしまれらいのつまのまかり三年
またかうあるよひかりもしかまへてわかちら頭
とおそちしをせんそむさいいさうとものう
わさいのうしをもあらかりんいつちれ刀の
むかしもみるへきこえもさうひまへんけり
おりさそわかともなかしれらかみまいてはゆか

くもをもつしてにけりるさ遊くまれしとめてりしこ御
むかうせんちんくゆくしとうしすれはふてしれむ
ぬしく御あわんせらのうれしきいふおもくを
すれんさんをうるありそてしへいおんくする者共
をあはのりわからゆかなそうしひつしすゐ
御大事とてけるむかしにけそくくれとをかう
せくいかそんのうちひあくしろはいろおね
けりはしたのうのわしはしそふれしてうへくとう
よしあくおれゆきいさしまし様んとをてう
生死をいてんとすそれとけりをとせゆきそ
せめさくのいとはそいひかてしむしむこうの今らしれ

かやうのはんえんをうつしやうらし大寺乃人傳くや
じゆ二のおんさくしと一日あはつさい法を修
ずすりほん乃法苑珠林乃その外くはしくハうに
も見よりつくへからんかんきうそうらハれとえん
やしふつよくミらのつくていさきんいつうんまえん
てうかうきあかりやうきよむれしかうあまりをや開
白いけ乃さらりをへゆかへくけをとあまりし記也
かつもそうとゐりてあつしとそもみらかるへゐのうし候

顕註密勘跋

藤原定家

此三帖の注たくしつさるはうまい浦くつへきゆゑね。

もやしわいとさうすらんハいえん歴ゆらしふかう
このむらひろのくしてましりそり昔こそやう
思ゆ事ともと一紙あり。かさのゑしとこもれ
りひわけりねあかけんらへるうれ言あれ
ゆよりよ云ろくおりりう法り称久んやふ證ゆ
くしかりらかしし。これありしうあひらくれくい
まさうに疊じこゑてこういまりまもなせの
時和哥評定の庭、方合判詞あよふやう也
し事ハひろくしさゆすくこのむすらとゆ
てハ家のえわかるてといひはかう歴らうかる
人うとえゆしりしこそるそれうす事ハ奥

義集とうしなかりしいにしへよりためしなかりし集
をりの統りし者こゝに平すられたしためしなり
ひ侍しをもいふにてたちからくのみす侍る所の
かさのつくれたる部しいとうつくしく見ゆる
みえし侍るに依りて清のちく小西まてりけ世
及し事いさしかるゝ人なとしらるかたといふ
かさ清家侍るね家者統まて、此奥方りか
きしすいつくつ色侍しんいそうよ者り
祢しご通てうかしかまこされ清うえ見ん人の
おかしあらせんかさつまねもりは甚奥侍
つさりや。自他面々をうひさむる人なりと

されと志しまんハいとかくこしい急る
継し。成し也伝ふのかゝる出されけり。
いかさつしまらふつ先祖の事し縁りかれ
されにしいわしく色侍く覚よ清しく公作ら
ねかな桂縁しあさかつしすくよらつ結しゝ
かも此成て勅学博覧これより後の世の
いつくあ侍りん。まことしの筵物よし見侍し
か文なうしも次つふく公なりしいかなるかゝ
そうわも此集の統と三代受つて継しる人
みりもうつくしそ侍通のしらうされ給
へりなか此かのおを筆を染されたるのや。

抑崇徳院ハ貫之自筆本也古今伝
きり数も四十又清輔朝臣各申うつし
出されし伝を寧桐ハ真名仮名乃字と
も一字なるくすその体くそもんしを
かられ仰られしかは去年ハ真名仮名ハ仮
名よ云写抄此本当時再見不審甚多ゆ
信用しかたくおほえしかハ先年前令書の
説へと受させらしかハ其乃説とうし
されたの候て要とかく我家乃説とは
ことされしとむかしよりとりよ仰りしよ
を家本ハ清輔朝臣の注古今とや

子とみえと仰しほの外れるハよくよくよむにこそ
まつりとみ仰しよのらかねとみは秘也と
申よの見仰ら人仰しを穏なおかしれ
いふ仰らし事なきにかれぬと出やまち
なんおほつかなき仰し

宮河歌合跋　同

神風や宮河の哥合勝負注し付へきよし侍
し事ハ出来しけ二年あまり心をわかりね
りしかハ宮内守神乃かくみそ家にて
事くかれ我てハ家に傳りしその義にあつき

文みえん事とて下ものゝふあらす。されハふみそ
めしあまり代々はぬきていまた六代すゑ猶趣
をたりもえてしとそのつゝ難波津の跡を尋
ひしかとさらに出雲八雲はいくくれ
みゆらんへよもろこしの萬葉の時するもいく
り又勅撰の中とや中詩人才士の文揃
三家あるたまりにきれて歯しくや摩まさ
しゝの家の宗まれふ所あらきんとさこさい
つまをとあしよしといふいつ明ら方と源し
流しとくとひそう尚処しかい雅よ壱ことか
ひくいはまをと歯しくてし紙へきよもあ

に時よりう所よつきくぬよみほめ花しる
すらひよそてあらへきしらは古体と試歌
合ハわきて沈思ひて合せてく歯ハれたる小
あらに角に松洞くは手法流れりゆうゝしの家を
もらひくたしひは風をさ妙りて通風る所と
とやりひあらき勢つて左右かたちをもらはれく
はらいまれ心幽て奇の道もうて高しく宮
より五及もく雲よりもたうりう流
もれるあつれて妙うされて雪ゝの草の
みしうき詞いみつれくきわいはさん
うるも明く花よ妙しくいしきをうれかと

波浪の音しめやかなる人なみ、静まることよ
ひゞきいつも色に常りすておりひゐせん
らるを深き美の蓬莱のみ古しくかりゐ仏
こゝろざし仰ぎ見れば雪の葉を御さま
川の末にぞおなじ世一のあさけのみぞあ
はる仏の教へ悟りもしらん事もあはれ
しかふかきを縁としもいとゞあはれふかし。
又まつりにかやしき様にも道をこゝろざし
くりかへし鈴いよよ身をたのみ及びなし。
位すれ五の名つけてくいはことに笠山のを
のおもしろき捨ぎたる名をとらむ然れど

月のゆくよるゆかしく法流のくまつもくもる
かくれば済度のちかひも今の下にも摩のこ
とまつ深き海の底より探ぬるさまいかなりと。
正木の葛のまよひの道をいりたどるあはれ。
蓮葉の露おのかうへ八十瀬の波打わたら
う人をつかりふ旅路にたらむ渡こそ衆生ん
と守りしるべ文竹の清流に寄とも
まつ信山のことくならむ所まで古き験や
御法まで今まで残こし人はあさからずも
おもひしと仰ぎたるしるべにいかん心よりて
まなびくまつのみちわけいりまいらせん

十三

春はまつりきせ花多とおほ花ぬども
思ひわりもじのちの春秋
返し　西行
春秋とさみかいはりいてゝうたうる
月をみれとしはなうわとさん
家隆卿まよこよろう文
同
庚申よ業しおほかくさまいしぬるよまかそく
ひかるもいてくほあゐてはいよ中よあらる古一まて給
くう年よ申せしとそみせきやうまんはれ文をみた
てよみ様りをそ従姫をしうしはれ給てすてそい

十四

くるゝもよはひをもおほくつきぬる年の内わればなくし。
うしろめみてかりしてもけむりなる秀句して
おもしろきうれはなれと。おもてしく夜ゆこゝろみ
さふらひけり。西三首同じけとるうしはなきい
うふきまれなかるまゝ志いそくは作て給ける
ほしくはけ返され。左衛門督為家卿督の寺に
みなもさてはあれとんも得はいのこと文をゆち
ゆうりはりんもうおほそてやうなる志をまして
もの給ゆとよ云付て作かりし。けゝく沙汰
よかりちやうとのり自ら許しろうしはらへし
やうあるぬし給いつまする事ともの侍る事。

んぬるころ二八おもひもよらはいりそふらひたるそ
しくゝゆりし給ひし心ちこそよにかとひあれ
御文あなかしこ給ひしことはいふ世中のそはきこえ
わらはゝ飛かのやうにまうし御しらさま
をはりの御まへにおほせ給ひしもてなしに
のみかへりみられし御返ひとへにはゝのみはかなしと
なてふくしかいまうの御はなきとの清うしう之生
れましてからおもてらるゝ恨よ別まいまするに
いうよめく秘蔵して安否のゝとくしまする
かゝもとにかしてうさせれいし御給をるやうはせ
まいらせはなかれそふらしくあるへくはなき

善の御かたきにはへし白河鳥羽院おはしまされ
候へしかいかなかまゝの世中よりは御はまいなきか
しくさ候ふ事まてもかしくはなりとて
ていは御てうひんは申さるゝ御おもはゆへ時雨流れ
なしくともやうなかまゆなく涙にかれても
おいかへてはなし御おみかみさまにてかならす
は申かはいらしなかよらせ給ひかならす御
ひさしはれんともひさらにそうまてさはかれにて
ふみまいらせ給はんほとはつきましとは思ひ
ますめしけなしこのへしきらひて聞はまいらせ
しられともやうしまひてたいせんよりゝ御

清書は返し〳〵しても、わろく候はゞ、まず
りかなとしいへりけまゐてや〳〵のとらかな
く光元性々様をみて、廣中も清観しるゞ
つ自然とあまりまさだいうかく志ほし
めし清晩へしもきも死くらひうりしよく
はつき風ともいはが海はきるぞ故橋返厥の
我等といふみ経かことはまへこ年但いまし〳〵てまつ
りけるやうは、光元は、さ、西時まへとそれは世
間といふ文故義まいつれぬらん、候しなひさらう
でたらとも推量しはしまゝ、筆をなんくうるゝ
しさきまもくつすゝうれしきましく清成かり

つさはよりつれわうて夜なれ流をみなみつら
室おのやうまは同のみならすへりはいへるまず本代は
いかくみあつかまとも不思議ともいはぞ凡心も
詞もなかりしはいさましいくは上れ上すて中下は
我等もはぬしさよおらかてかくのられ右衛
二郎まへやうなたへらぞでおもてもつきでものみち
られてもはずうきよみつ入道の子あられくろく
まろなかりしはよみのかれとも志ふとえ
はよ様男もいかくれのひ志つもはいやしくもの
志かれまりとも、とくいかそれはなれは
色し候しくくまつうれいへいうせてなかり。

此度二月より伊勢参宮してくはへとも
はやく候まゝよは乳駒めでたらすそ候はゞ
ゆへよ候え

長綱百首乃端よ書る詞

同

わきと御哀よ申は此歌寄とゆるし見る
なとの心ほはで見ほし題より とあひて神妙
はゆでまうく此とゆて也とはへて御頌御
いまも此者の道にもに神妙よ申せしあると
候ほ熱はするれしさてはきれの此歎の
御歎まし実尊常よ申とせさて寺読給へ

くれくしゆかとも見る・同あひくとうして寺
まうくうと世話へくはや・唯其素林名とし
申寺はあまよくは・御し文字給はゆるは題
の寺はあ御へこれひと申し此は也られて迎
代れ人は我かゝるまつに後年作てむとくと
よみてハ一定題れ寺よハ失満のは也・此心又十
年ゝさ九ゆではし歎なるとも・其骨しは
しへ素寺てもあんいまうとみゆそでか
きふはしうとも題よむ人ゝとし沿きちてゞよ
見はしへいせく天性のゆくきとよ御才れる
てあさ寺まてと絶はしうとも又ひとくハあまれはし

を。近代ハいよ〳〵おもしろかりける事か優なりけるに
と。つねの人の事なと申し侍也。此心得侍らぬにこそ
の作られつるを要とすゝめて。申出君ハ民部大輔
成通卿厨薮田海いれしは蝉丸なるか。先の
されはこれ和歌ハ記大夫馬允か。ゆきあひかたきひ
みのもて腕にそりけりていてまうしいはひこそ候
色なお様々侍る義月といはれ梅なとも申たき
いはれとおもひ也。おなしく蓮縁のあり事一書に
なれはたなつかし猶られしとも。詠ぬつき極
とこそくやみしも。色ましもなくいは
さんさにけりかたき成道と候ん元服ては

詠ハ色し。文ひとつまいらせ。危急なりしてん元
ねのもめつおほゆる神也。よくよみすき侍らはゝ人
しりていふまじき。といふとこれのみに此事しめ
さいなむ道理ありて聞えしよとて。大かたものやうは
まし。信合さゆへにいりまて。思事とや
もの住人ならは。様乃ためしもの安きこす
りけるへ。おほくとやはやしは。歌詞す
さうい世こまく作や。一定こそよみまゐらす
候へしよりは色くは

和歌初心抄序　同

抑和歌もと天地ひらけしよりこのかた、家
訓のりくあそひ、鬼神をも心を和らけ、家
男女夫婦乃なかをもやはらけ、田夫野人
うかれ山人の有情非情鳥類畜類まて
も、みな哥をよみける事なり、されは
く人とは性ともなく、歌の道は卿も
つきぬ色さは、鬼畜木石まて是をあはれと思ふ
きは月日と成くり、藤の命をのふる
とく、羅成つくりもうすさのをとて一朝と
賞し、花乃さとそてもいうしからつ疫はめす
ちはやふるすてし、黒髪に、もつその雷とよめり

かむなしくなれり。桐かへくさくまての
やうまたりは給ふれ、よろ川嫌の人
何乃営はいとても、急さいそうく記事をや
人おりしへつらはされ文

越部禅尼

海川いそかれは、ゑらほ心さしあつかれはて集
をかけりては、事かへらくされしうよみ
らのみはてハ、みをたしく事を見はつ家なう
こゝろめし、此命も三とひまてみはかう奔
まさりては、なえりのかあなめてたくはけら
と見はさて、和歌撰集のたとうへはたくあり

のちの人をとられをそへうつて。詞花御せうさる
ことはのことはやまとうた日のをよひはりと
まてに。弟一といふ拾遺は。そのゆへに三
代集へ事をそへく世もあらはしもこそく
御ことにて。詞花とよふ事よきみ御
しられたりとさはぬそのくちを拾
遺にも紀歌あまりおほやけまてはうつろ世
なれは撰もてられぬるやうけるしく
は。金葉集詞花こそやうしくなるやうには。千
載おちしはまうち御てらん勅撰からへめて
たくは。序れともはへと何ちやらん大やうに

見は哥もいてうちくの人さまならんとも見え
はいすは。新古今文集の花秋の紅葉とはく
はまことにませる。鳳池乃秋の月梁苑お雪
まお和とうやうる。郢しからしてはまつうく
なる詞つうひまうるあ。めうつらしくけるう面白
く。家隆卿のみんなあ序なる詞ならて論なる
れたらへみたれとも取としはやうには。新勅撰者
かられはやはつすは。中納言入道殿なとぬる人の
しては。こうてんてたよりはかくいさかし
拙まてはけくうめてなくは取所あるあへ合
いてう撰はいし。御さんは。其事をなへき院さしう

里内裏にてはきこしめし。聞もられなかりかうそ
そしはし奉よくはらめさおつき給はれ
あかりたつ。いるさしとにかしゑつるて入道
殿のえらひか中寺僧都等七十余人とうはせらる
はうるちらつてなやとうられなかへはさ。法ち
皇后宮大夫俊成の孫にして。定家
みせてえらはるさ僧都あまり寺のせてたれは。此
出雲国へはられてさらにいかり候。らせをし
らぬ中なく人の。時くらもしてはるかに
海くはらはさ前。にれと縁かるよけもあらそ
あしりつるて。あまりたなくあしかねきあくた

へもつるわたるへもたれはれぬ。ぬしへりへし
るあ房の。浦と袖のさ明かうに夜もまいて
る袁のすくてまつて。讃にてつひかなめるかく
まいすそのうためやつくしつら。袁なるしりもうら
もたふとそ。あふうたへしやとうえしたまへ
と。右殿のさくらはらりてそてさうかくはゝ
なからしいて。鈴も三扇しくもさうかくて。
まつりうそくやふうすもはかゝるあらく覚
は。帝より洞のひ比矢白よう。父よいすこし
若てはさしまさせてと前の跡は勝かくおはしまさせとやは
つかこと那く攫し上さ方絡ゆくは。勅撰

命はこよなくみゆるあてくちをしくは、天暦の
年ころや按察の御様して宮のはかなくなりにしを
しは、いかなれは宮こそかくはかなくなりにし事
ぞといひては、つくづくそれこそ又按察院の御孫、
右はの院のはらからにてこそはせ給ひしも冷泉院の
御はらからにおはしましては、源氏なりてこそあらん
のおほんためにとりわけてはおもほしまさりて、かくは
ならせたまひにけるを、およそこそ猶もとより
て、ことには年のほとのさためしなとはまゐらせたまはず
ちかき人々もしらては宮
よそにはみまゐらせし人もしはしま

ゆくへの梅はあとこそあれまさせ給
ふくこそはべりつてふかくいかにしてうちとけさせをも
人もなくいけりてもやはひぬりおもしろく
ちるまじくもなくもなけれどもまだちるくは
しくてはなの宮の年もたえてしつゝあはれ
くさはいつも思ひはまかくしつゝれちる
しては、のみもしられぬなみまことにてちく
櫻もしませさせたまはせ、命はくかくれ
にまとみなくまつりはめかうつくしか
小侍従のはじ人のちりくはとあめのも
しくは

島のとれともしらさりな花里に
身のしらん人の迎見やは
秋風によみてまつ露にぬれそて
腸を絶つ思ひをさへそへて
わさ海しくはつかい思ひとゝめてらみては
いはん代忘れかはかれとみまして契りはれに
うき憂くあふさし月日その使ふ
かりしわかれる新にられしき
よくおもんともさらうゆかのうらにも

東関紀行

源親行

齢は百とせの半に近つきて鬢乃霜やうやく冷しといへともなす事なくして徒にあかしくらすのみにあらすさしていつこに住はつへしとも思ひ定めぬ有様なれは彼白楽天の身は浮雲に似たり首は霜に似たりと書るあはれに思ひあはせらるもとより金帳七葉のさかえをこのます只陶潜五柳のすみかをもとむしかはあれともいまた山の中の栖庵をもしめす猶都のほとりにかりに住居つゝ人並に世にふる道にたつさはる是則身は朝市にありて心は隠遁

よわり猶たらう所おほくよ思ひたちにし仁治
三年の秋八月十日あまりの比、都を出て東
へおもむく事ありき。まだしらぬ道の空、山かさな
り江かさなりて、遥々と遠き旅なれども、雲を凌
ぎ霧を分けつゝ、しばしば前途の極まりなきにすゝ
む。終に十餘日の日数を經て、鎌倉にくだりつきぬ。
其間、或ハ山館野亭の夜の泊、或ハ海邊
水流の幽なる砌に至るまで、目に立所ゝ、
心とまるふしぶしを書置て、忘れず忍ぶ人もあら
ば、をのづから後のかたみにもなれとて、
抑、東山の邊なる住家を出て、逢坂の関

打こゆるほどに、駒引わたる望月の比も漸
く近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜
の月影ほのかなり。木綿付鳥幽におとづれ
て、遊子残月に行けん函谷の有様思ひあは
せらる。むかし蝉丸といひける世捨人、此関のほと
りに藁屋の床を結びて、常ハ琵琶をひきて
心をすまし、大和歌を詠じて思ひを述けり。嵐
の風烈しきをしのびつゝぞ過にける。或人の云、
蝉丸ハ延喜第四の宮にておはしけるゆへに、
此関のあたりを四の宮河原と名付たりといへり。
いにしへの藁屋の床のあたりまで

あふさか山にあふ坂乃せきあり
東三条院石山に詣て還御ありけるに関の
清水をみさせ給ひてよませ給ひける御哥
あまたゝひ行あふ坂の関水にけふをかきりの
影そうつれるとよませ給ひしそいかなる御
心のうちにかゝる歌よみおほしけん関の路を
ぬきて打出の濱粟津の原あんてうけといい
まされのうらはさゝなみもたてはらちまた昔天
智天皇の后代大和国飛鳥の岡本の宮より近江の
志賀の郡に都をうつしたまへり大津の宮とつくられ
せたにしなまめかしき此ほとりにつゝきたる宮居の跡そ

ありしも哀也
さゝ波や大津乃宮のあれしより
名のみこそ志賀乃都は
昔の都はなりぬせたの長橋うちわたし湖水
はるかにあらはれて波瀾打寄比叡
山もこの海をうけてありまん言の葉にもれ
ぬ清き舟のかよひ路波風によりなくともなき
そし
世の中はとにもかくにもありぬへし
宮もわら屋もはてしなけれは
此頌をよみしは蝉丸の野後にこもりぬ

の末露ふかくして。旅衣いつしか袖の雫とこ
ろせし

あつまちの野路の朝露けふやさは
たもとにかゝるはしめなるらん

しの原と云所をみれは。西東へはるかに堤あ
り。北には里人栖をしめ。南には池のおもて
遠く見えわたる。むかひの汀みとりふかき松
のむら立。波の色もひとつにて。南山の影を
ひたさねとも青くして洸瀁たり。洲崎所〳〵
入ちかひて。あしつのなとおひよくれ
中に。鴨のうきねしくよひちかふ所なり。

行していとゞするやうすゝら。鄙と云川旅人のこの
宿にとまりとまりけるか。今を行をくるを終
こ多くして。数居も涙いとゞかゝりいみしき
しそかりはなく世のうけい花香の汀の洲泳
まいらすきりけるとは和歌を
引人をとゝまし。墨とかきしるし
あはれのゝ海さるのちかきのこし
鏡の宿にいたりぬれは。昔なゝの翁の寄合
ひて。老をいとひける哥の中に。鏡山
いさ立よりてみてゆかむ。年へぬる身は老
やしぬるといへるは。此山の事にやと覚えて

宿とりし所おかしく見えしかば。程なく行か
すぐる谷あひ雨降いでゝちるをみ
立まよひ来ふはあはれんかゝみやす
きしき世なしみれはちる花をうき人の。らばと
行暮かれたる。むさき寺といふ山寺にあかりしと
海道をまつりけるとこそ河のゆふ風更ぬ
れゆくまゝ身なりて眠まくらにのみ引人のきぬ
おこち浪枕よりちり〳〵し鐘の声暁の空の
清らく。彼是覚寺の亀山の草の庵をまた
深覚えず。やをやみゆく。なるぞゆ来
宿の鐘の音思ひ行てあはれにいとゝかゝる

物かなし

旅衣いくよもあらぬ夜にしも猶
まくらにむすびぬ床の秋かぜ

此宿を出て。笠原の駅家おり。さる程に。
木曽の桟といふ梯村あり。下草に紀の宿
旅宿につまりけんかげを思ひ。そのかく暁の
月日かれし。さらぬ袂も面白

かけてしるべとなりし山にしとゝ霜を
見わたせばその桟のしら草

黄菊咲けり清水の井とよばれ清くて此木
の茂その岩根よりも流出る清水。餘程涼しき

まくすゝしかりける。実に身にしむこゝちする
なるを。除熱いまたつきさるほとなれは従容の
詩人多く立よりてすゝみあへり。班婕妤か
団雪の扇秋風によつて皆忘れぬれとも。未
なき路道なきとも立よる人車を物うく。
更にいそかれ。従彼西行か道の辺に清水
なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまり
つれとよみけるもかゝる所の事にや

みちのくの人ぬま清水にしらぬとく
ちりやしも梅旅人そかれ

かしは原と云所を過て。名流の関山みえ

てありき。谷川音の庭に落る。山風雲の梢
に渡りてすさまし。日影をみぬ木の下道
あはれにおもひしほとに。是は不破の関
屋なり。萱屋の板庇年経によとみゆる
かな。後京極摂政殿のあれにし後はたゝ秋の
風とよませ給ひし所はいつこなるらんと。古
風情もおもひしらされて。いにしへの哀れなる
うへをもゆかしくおほえて。宿とてもなかりしをすゝ
なから。藤代川と云所にとまりて秋更る夜
に川端に立出てみれは。秋の空中の晴天。
流るゝ河瀬にうつりて。照月のかけを数みゆる

里もみちもおもふ二千里の外の古人の心をさへ思ひ
やられて旅のおもひいとゞまさりけるもわかれ
たゞ月の影に気深くて花洛を出て三日。橡
湘川に宿して一首を吟じて今秋をそゑ。
の月に向ひしがかりそめに旅の先途一千
里の雲井とほくあらとおもふ波の濤をへだて書
にしるしつけてよ

しるべせよ秋のなかばもすぎぬらし
うき旅ねの月にまじへて
かや川の末宿の前にながれてそゝぐ人わ
つかまつる里をさして急ぎつゝ行きなるみつのまち

けふは市の里になりぬ。あらうたうとも云はば。
往来のたえひまなくむなしくしぬ家士売る。
夜みくわうや人によううらんとするあら。花のちる
みよいやうかりけるかな

花ならぬ色香もしらぬ市人の
いふつけなしときに見る家川と
尾張國熱田の宮にいたりぬ。神垣のあたり
ちかきかれたやうなる気色にて神さびたる杜に
梅なとしけり杜の木ぶかくしも。夕日の影さしくもり
へ南面の玉垣久しく荒れたる。本地にかはり
ここ流れをとりかへし。神をあはれみさひそれ

中にハ。ねうしてあら御鳴しての始とせり。
稲(?)りさわかさ御宮の作りをりやうよ見るく。
青(?)く白きよのかうて、菅(?)ろまてりし。志作(?)のもの
詠(?)てとしんをおくゆゑに人丸いふ。此歌ハ素
盞嗚尊なり。そもそも出雲乃国にて家をつくり
給ひけり。八雲たつといふ大和言葉のはしめより
よしあしわかちもこよ、其後景行天皇の御代におの
御ゆつりとそれも給ひ。日本とハいへとも、又ハ此尊
神(?)尊雑と号し。東夷征伐なり。景行の御
子日本武尊とかや。夷をたいらけ帰て給
時、歌ハ何となりて云給ふ。新治つくはをすきて幾夜か

ねつると云けり。一條院の御時大江匡衡といふ
博士有けり。長保のはしめつかさめしにあつまく
尾張国の守にて下りけるに、大般若を書て供
養して供養侍りける願文ニ、吾朝ハよみ
ちなミ、任限之うちに、古へより倭うたをするハ翔(?)
まるいくなりし源と云ふことそ。我よみなして
く世の代

此ものはしめてや人のするをしへ侮し
徒(?)のいとみ世をむしけとらまたし

おのゝ文とそのち出羽陸奥にすむくれて、道殿の
月輪帝宮に。夜もすからこれにくいとこれ

まこと神は旅のまもりにましますを信しあふ
哀かしこくおもし

十六日浅沼をたちて浜をすくれはみえて
いかくしおいのさかそくるかしき

やうく秋のはらより二村山にかゝりて山中を
うくとおぼえるかほふ。東海くるみく海の面
まろうふあり浅をとまり。波にさそはれよつてて
山綿よつてるたりやよら

あらしを二むら山のかりくしか
あをりと思ふ波路るなりけり

ゆくへくとて三河国八橋のあとりはるれたり。吉良

業平杜若の寺よここかしこよみかへりかれい
ゐのこ人よおもしろきしきにかりとかりいかられ
くそのあかりとみれとも枝草とかけしさ物
いうかくあめ。いれはのさそかくらし

花ゆくよむらしるゐとしのかうしやや
いかえの家と名ふしせらし

源義経が浄瑠璃の寺にてかりせる時。と海道け
路岳のりとかいたりける寺よりいかとよゆゐ
三河路八ちし浅茅とのゝやかりしきぬん。
とまりしけるとも思い出られかるれ。やゑ
坂しき雨をさくみやち山のかゝとり。赤

故しこ宿なりし。家はありしを我女以人に大江定
基の家と出けるも。我て思ひ出てまくをのこし。
人我飲ゐなりたる我縁つて語りとも。あさ無
別きと行しに涌ひの人そしもあへり。
渋乃けり世をしきりんなさく世の
おらはさもそて深乃紫れ
いろくるあるねりさはめくおもし
あむの川原に行出れしに。よりの色を深みたは
しりて山なく思ふし。秦甸の一千頃里とみ
はるかしたりん見ていうして。草木とともに蒼茫
すると。月の夜我なりいうなりゆんと序して
初も。我まろ洛ゝ京の中まよ住侍ゝ路々まゝ我道
ありく行来をまもりあへさせ。古武蔵乃前司
道のたまひし事は涌く。植置れたる柳あり
まさ法と言のしまくいなまれとも。くゆかくとも何
衣のまゝくしまれたるも哀なり。まなかしの召
公奭は周の武王の弟也。成王の三公として燕を
治めしとき。つかさとりし。前のかりけるに治し時
ひとりの甘棠のもとに居て。訴をきこ
しめし河。つらく人によりてすめくすらくの民は
いかまくそのまなの渭。草くゑ人の
思とこしくなし。甘棠羅をきりあらじ。国民

筆をとりては、徳政は世に施し、名は古にもし
継せてを抜群の殺生なし、法令をかん
ゆかりをも、後三条天皇東宮におはしま
しける時、学士実政任国に赴く時、例の
民をやすくし、事業の御詩をたまはせける事
ありけれ、われらの年は風月の情をいへ、御製を
忘れ給ふな、人心を忘れん、と申し
けるとぞ。後三条の御事を呂公の詠
述べ、人と身を協ひ候ひはかひた道の和らく
の法を、所（類イ）法りそそきり、よりて施されける
御なれたられ、世は皆法呂公と申す人。

世の政はこよなくゆるくして、仍来の法（ささイ）
さこそのまん事。たとひ所言は定まりたらむことを
若後には
ある人語りしは、これもむかしの柳から
なれそのうけと人やたのまむ
豊河と云宿の前を行くに、おり昔は云々
えば見ちてはむかしよりもあらためをかるせ
し領主は法を識なきて不津の今道と云
ところ旅人多くかかる間、いまは宿も人
の家居もみなよそにうつしたりといふなる。
みなれたるこそあらましけれよつかきひらきし海

まうすとはいひながらいかゞゆかんと見え
来たりし昔より住つきたる里人共は今
更ねうつらんとそ彼伏見の里ならねと荒
まくをしく見ゆれ

おほつかないさ豊川のかはる瀬と（をイ）
いかなる人乃わたりそめけむ

参河遠江の境よ高師の山と聞ゆるあり。山
中よ越えかゝる程に谷河の流れ落て岩瀬
乃波ことことしく聞ゆ。境川とそ云

岩つたひ駒うちわたす谷川の
音もたかしの山よ来よけり

橋本と云所よ行つきぬれは聞わたりし
かひありてけしきいと心すごし。南には潮乃海あり
漁舟波ようかふ。北は湖水あり人家岸よつ
らなれり。其間よ洲崎遠くさし出て松き
ひしく生つゞき嵐しきりよむせぶ。松のひゞ
き波の音何れと聞わきかたし。行人心をいた
ましめ、とまるたくひ夢をさまさすといふ事
なし。湖よわたせる橋を浜名と名付く。
ふるき名所なり。朝たつ雲の名残いつしか
よはひをもなそへて

行とまる旅ねはいつもかはらねと

なれくる海士の塩やきけふりさへ
さゝめも此宿より一夜とまりしやどのあるじ折
ふしたゞならぬやゝ座のこゝろくまりけるとも人よ
しも月の影曇りなく洩し入けるに折しも君
ともあまくこゝみえし中にもとりてゆくゐけ
こひしきを恋をも語りし床の下に晴天とみるに思
ひやるに打詠しけるかもよろづ思しか
とものも思ひあらさかさけ気新たに我
月はつきのかくありけるみき（みきイ）
名残おしく行程あかつき此宿を打出て
引きけるにひさいの家とぞ所に来よる

里は小舟は駒にかゝりしは海の流
れし錦花繍草のたぐひにもあらず白
砂のうへにありて青松横たはりにほふ是
松なれば生ひ茂りて松風梢にさえたり文あや
しの草は唐土のえらぶ漢人詩客なしゝ所
摘むやうに詠じけむ様なれば流れくると
須磨のよしあらつれなき騒人のかならずさけ
いはゆるのはるかといふ須磨武家に来る観
者は度々御堂たしや折あればかよひてや古里
そめなる草の庵なりけるに雨露もたまる須磨寺
月をさうかほに一とせありて逢念

へける筑紫人となり。此観音の御前に詣い
てまつりしか。あらし此本尊をもうけて古へ
ひさしく御堂はなくてつきしかんのそらにて
月玉て作りしより。霊仏をもて申し事はいまた
よりも御堂を造ならは人多く詣い
なしと云ひつたへ。彼堂敷をその御堂へ参りし
それは承応四の頃申されしそとわたらせ
まておほきもの縁を解きしに。縁書にはは
しらぬ地斗帳の細に結ひつきられたる誓の
おほとの手ならのつゝしといへるを。判無しく
出れ見えて

さゆらしか入江よりあつまり見はゝくし
ありしまつのましくさく水と
天龍と名付たるよう流なる。川あるく流るゝ
守しくさる様のおもころさうあて舟もさを
こと速かられた。此登の様人をやとくひらひ
乃居りつさかさし。此河水まさ汐る時舟
なとも其のつゝりくはえりく彼のをもり川や
なるをくひ多かりとゆうして。彼亜溟の水は
流みりひとせつきく。いと危きならとしは
志ゝとあまをとも人は仏りくるるとも。志つら
すり流なりしと明りてかけ。あかとおつさとあくさ

ゆふよそて世をわたる道のもとりしさするにや
をのか行のみやは流るゝ世中の
人は心煮えかへりてそ見る
浜江の出府はいはせ所つゞきて家ゝ有
けりく一日二日とゝまりされはとありの
小舟にて棹さしつゝ浦の名所を見めく
れは志ゐ江と湖の間を湖辞をこ漕りて
当は桂浦の浜袖を濯しこゝよりは松の風
人もとへかし名ある所を擣衣の
宿ゝそれ佐に扶桑の泉につゞく字すら次
たゞちにうけ次しともあらふなまし

とはゝおかみてゝ
浪の音も松林ありしもいは海の浦よ
さは山の所々の名所をそこく
こゝのまち三次ゆる社おりて原その御前
をすくそていふかおりてつぎれし
ゆふぬれきてそ多けむ今此ま
ことのゆうなる神乃ますしは
小種の中山は古今集所ありてとり給ふ
とよみける所は名高き名所にて人とはす
されともこゝよりよくへも名そし水は深山よて
松林嵐もおしく当古野山そて秋の花家

しかも谷より嵐はふきつたふらかへしく
ちりて麻の香みちて袖にかほり雲のうへに
あまれぬらし
布となる海よりふきぬる柳とよむもまた
雲に布とさらす浜ゆふの中山
此山越え過て程なく菊川と
云所あり又むかし承久三年の秋の比中御
門中納言宗行卿とらはれ人にて東へ
下されけるに此宿にて西面に書付給ふ昔は南陽
縣の菊水下流を汲て齢をのぶ今は東海
道の菊川西岸に宿して命をうしなふと

ある家の柱にかゝれけるとぞいひつたへたる
いと哀にてそのあとを尋ねけるに火災にやけ
てなきのよしきゝてのちそのあと今は跡と
てのこりしをもとめ侍れど跡もなくなりぬる
よしなれば世のならひとはいひながら哀にかなし
けれ
されば川とうちはじめしも今は分かたれきかり
あさしほのせはとまれるいはせん
菊川越えわたりてしばしゆけば一村の里あり
名をまとはいふといへり此里の西のはづれに
小すこしのぼれば奥山の大井川

残見渡したれバ愛宕と廣き河原の中に入
一筋みだれ流されける川波にまぎれてさくら
ちりひかる桜にてはなのしとけなくしらぬ
みなかみ中にまかくこそしられ侍る降雨の跡
ろくおほゆきてこそ紅葉ちりかくやすみれまじ
龍田川すそ紅葉ちらしやまもりける
　日の法華の旅のあはれならむかわる川
　ときくめぬれものこれ色にかれ
まへ鳴の前にすゝき悲歎のへりに浪くだり
ちらるかとも山の松に浪に立かりてそれぬる
春しそ出るにも嵐冷しきて精に動きそことふ

て茸のゆくたよる瓢家うきも浪をさしてこれ
かね
　あわれそこの身をしらぬのりし思わすれ
　松のあしもとよりかしこに嫁け
宇津の山越にゆかはいつさかえくはこゝろもまだ
むかしの旅をへ送る波枝業平かとしるまゝ
こゝろさしまん頭はいつかうむかしし見行かぬ
ときは道の程よりよれもかへるさもかくれぬ
无縁の世をそて人あるはしはりむしる
かさしあちらはれはつ山入く一こゝろはまことの
草の庵はちりに独の僧あり蔭像の酒孫陀

にとうあるまじく。浄土は法まんまうけ里
をしらずは佛の奥にかなし。發心の始め成
為こゝは足ろ身ハおし此世の志ならぬ心あ
思ひはなれがたき道心を佐しむる人は身をはなさ
ぬところあれは理を観じ給ふにもしく。佛
を念ずるに仕そのかりし。離行若行の二の
道をたどまるとしりて父母と山の中に眠りる
いまだ里にありて勤めまじれたるに有し。あなた
人のさうにまつきりて此山に居住はひつて何事
さは年月經しきうつりはあらぬし。此叡斎
う首楊の中に入て龍と云ふ苗藏徳也。

許由が顆水の月にもあらぬことのはなれ一
瓢の器をかけりといへど。此居のあたりも
しは鉢叉鉢にうつりて須臾を見えて須。紫桁
らふかなく行ゆかまくも出でしまするさ庵すら。
身は孤山の嵐に庵りやうして。白氏浄域
の電法のよら庵せら。いとはねとみゆくみえて。
井く面られゝんかくし
　世をいとふ人のおくやふこし曲し
　うき世山色の庵ねすしてもそ
此居の中より嵯峨寺より須磨と云ふ所よりい
ありしく。大かた辛粉海の年頃より出家也

見ゆれは。奇なる事あまりて書付るか中々に。未
詠ぬ所はせよきん宇津の山に。紅葉を惜しむ蔦の
志き道とあらむと申して見ゆるは。それ賞
よ云なし

それもなく富代せすきんといつやま

ふらくことあるつきぬくして清中
根うるとうかしよ。あるよ浜よ名残たらく津
こあきくらよさ川さ海方る塚あり。人よ為
知れる梶原か墓となむ云ふ。道なとして
然きとなきよあらとみ西に北もの。顕基中
納言の口とるき給へ罷さん。年ゝ小春のきふる

生るかとの人の詩ゆなし出されし。見るを又から
つくてたる事なりは名たくりも好ゆうしとあはれせ。
羊右伝ゆ読れはあしれ流るある孫人ハ富よ
をあきうでゆや出し給へん。枝梶原か二代将軍（羽家付　イ二元）の
恩に驕り。武勇二男のなれはいよひとこつ
よ人へあらしそ見えけるめ仰たる事に出ゝ富人よ
よ人の横ふうして。怨よ身を亡ほしへさとりなか
ひをまれいひとおしものいんとやかれあん
此のくえ弛うらしけるかとも駿河ちうかて
所にてうされとおもとさうしらさは富士も
有けるも此気よ思いあくせとうう。潜波の流

配所へ赴むかせ給ひくらけ志戸といふ處にて
くれさせ御座しまさけれ法然西行のは
みくしみまいらせしに、よしや君昔の玉の床とても
かからむのちハなにかハせむとよめるもあは
れなるまゝかゝるかハゆりして志賀の海のおも
むかしをたつねてあかりてみちかけ
むかしよ昔日ゆ
あくれハ先まかられし玉鉾の
みちのへめし見名残とくめむとて
清見か関も過うくて須臾やすらへハ沖乃石
むらく塩干にあらはれて波にむせふ磯乃塩
屋こともよろしく風さへさはかしくて哀をもよほす。
東路のおもしろきもおほくはかりなり。
昔朱雀天皇の御時将門といふもの東にて謀
反おこしたりけるを平けんために宇治民部卿忠
文をつかはしけるに此関にいたりてとゝまり
けるか清原滋藤といふもの軍監と云ふ
軍監と云司にて伴ひて行けるか漁舟乃火の影ハ
寒くして浪を焼駅路の鈴の声ハ夜山
を過といふ唐乃歌を詠されけれハ将軍涙を
なかしけりとつたへきけるもあはれなり
清見かたと聞しといふ〳〵ゆく人て

なかりけるゆへとなん
此関屋のかたはらに興津といふ浦あり。海
より向ひたる家にやとりて行あひて、いさ
よるの浪の音もみゝちかく聞やうなるに
みしかくて夜もとうくいてゝまかれは

清見かた関もちかひになみ枕
かけて浪ぬれし袖はあはれなり

此あひたはみなしまとなむ月もなかりけるに
夢の枕もまたさめやらねは、浪の夜をかさねて
夜ま出たらうらの浪と云なからある縦般の岩の
見とを海路のみえて、よ。沖津風をさそひ

あまの浪まをいまの世のまゝ、いそく興津のはま
むかしはかまふらしてかはらしかた袖
のもまそもけてもやはいなもし旅の衣そで
しみえ、ゆかれつていぬさんかつし

沖津風けさあら磯の岩つたひ
なみわけ衣ぬれぬれそ行

神原と云宿の前をうちすくるほとに
ある若き女のつゝみをうちて立あへる家の
まへを通るに、これは旅衣をそめしの店の
わかうへにつりそめよとてたる冨士の山と云
所ならて、ある家とよけ旅人のとまりやあらん

らん。昔香爐峯の簾は唐紙しける隠士
あるじ。其紙窓をあけて窓に雪を見しを
又。今冨士の山の雪を朝ゆふ詠め
させ給ふ秋家を行出て山の雪紙かきんか
詠め置もたよりすくなかりけり

ゆきの秋にいられもなしれ峰にいく
雲よりもの雲紙かりしやまれん

田子の浦よりうち出て冨士の高根をみれ
ば時しらぬ雪なれを打なんていかさ白妙よ
あり涼しく天よりふるものかをこそ縁の山
よりまでなかりける。貞観十七年の冬の比。

白衣の美女二人ありて山の頂にうち舞と。
都良香か冨士の山の記にかきたりけるを
おもひ出られて

海原の緑の風にみたれてや雲と
天津乙女の袖かとそみる

浮嶋か原はいはくもあしき道のりにくみえて冨士の
高富士の麓にそひて西東に行くしかはなりしかと
沼あり。布のひろがりて山のみかけを
浸しつゝ。水も水もひろく何か。芦なとに小舟
取ありて棹さしてかれける姿おかしき
さま紙。南は海のおもてまで遥にみわたされて。

雲の波煙の波。いとゆたかなりかたちよし。見る人多
孤嶋の眼下に座せし。白川のよそ遠帆乃走[?]
まつかれは、かぜのそよぐ。此方彼方の眺望といつ
きもとよりくよくみそなはし。京中は蜃楼乃煙
くゆらし立のぼりて。満風松の梢よりむせぶ此
東看は海のまうへく。蓬莱三の島の
ことくに有ともよりける。瀛洲とも名付
けりとやらんも。その所の神仙のすみか有り
りやあらん。いと猶くゆかしく見ゆる
新[?]といへは沼の入江より中の根れ
華[?]からも見えし浮嶋かくれ

郷くは此方まで千本の松原といふ所あり。
海の浜辺をしと[?]ほ松をうへよせわたりてみるを
の浜さいわるし。沖の舟まで行遠ひて。末
行衆のうちまりよほ数多株の松の下数峯
寺一葉の舟此方万里乃外とつ行く小舟を
見もまうりは眺望といつくしまをぬさかり
みまさせはまむの松の根ぶとを見る
見わたせはつく浮乃うちも
車返しと云里あり。武家よりやゝかへれて。
網つりなとしてなし猿しきこのすまかしと床
のやどりあるこそあわれで麻のさ婕かまねく。

こよひまての枝縛戒人の夜半乃旅ねもかく
やあらましと思ふ也

　　あれそとのつまとよるあはの岩まくら
　　いとふありうや袖かりねつゝらん

伊豆の国府にいたりぬれは三嶋の社のみしめの
うちにをかみ奉る松の嵐木くらく庭
の気色も神さひわたれり此社は伊予の国
三嶋大明神をうつし奉ると聞にも能因
入道伊予守実綱か命によりて歌よみて
奉りけるに炎旱の天より雨暴にふりて
枯たる稲葉忽に緑にかへりける

ら人神の御名残ことにたのもしく
かしこく覚ゆ

　　せきかくるをたの苗代水なかれても
　　又あまくたれる神そこの神

こゝをも出て道たれは此御山をも立出てな
けるかけく箱根の山にもつきぬ岩ね
たくひなる湖にみえしかりや山の井て
こりゆかしき底くたるへまて箱根の湖とふ
く又芦の海ともいふなり権現垂跡の本誓けたら
く悉くうし朱楼紫殿の雲にかさなれり粧
ひ唐家驪山宮ともいはゝれ巌室石龕の

波よのそめれけ。銭塘の水ならともいはひ入
しられしさ役なれ。ちらさき男の納ま
ちえ人せさ深紡人年しいのりく。法施ならい
あつくよ
今まりとい出ありひきれし声の海の
始うさめらさ汲神まゐりせく
比山をらきおりて湯なと云所よとまきされ
い。右山おりく下りして下けるて。谷川みな
らり湧さり。岩瀬の波さるくむせふ。鴨郭房
のまゐりしけるて水をすゝきたるまゝ。彼源氏物かたり
好寄よ。みえしゆよれ。深瀧の音られとい人なり

ありひゝきけくあたれなり
それあしたかゝいかなるにとあるめの
落瀧ゆきさ然瀧乃音の那
比富貴を云く随念よって。日の夕川うさ面
織てかりて今のさまも見ゆ一段行しま。いさくん
のこまくめられて。大礒江鳴ともりしつ東於ま
ゆき京さやへ。見えとしゆうなきまくて下るも方
しそいとんむうれ。荒る言ういうして下つけ
はれいかふりしのいりとりや云所よ。ゆやしらの
織の寄とうさく。ちゆり然前古跡よ
むのひろく門さし。行人征馬そくれのまくれ

ゆきちらしひうしろは山ちかくして宮古のそ
ら。籬の島生の契りけるのうらよりそらかし
猿店は都よりとほきさまかへりてふるさと
こひしくつゝあかしくらしけれはまつにつゝしき
わくらはやうやく和歌はのつき時三浦のとほうし
年ころ浦々を行くゝみれは。海との眺望を乱
そゝわれてこゝしくさま君なかくはりあらさ
所くみをとよし波わかれ
さもしさいちもいしさの浦々と
ひとつあるの沖は港の舟
玉ならぬ三浦をいとふよの波まなり

出る月の影はさやけさ
抑鎌倉は、ひらけし世々は故右大将家よりこのかた
源は水の尾の御門の九乃世はなれたるえとなる
きん人ありしをとりさかりめし清和のなかれとそありけれ
さるかゆへに武器を帯して朝敵をしたかへけるより
忠貞をさきとして弓箭の道をつたへて将軍の宮
と将てり官位と此所にかなり仏神をうやま
ひさかりく宗とせられしこの家の今盤岡の沙汰
なれつて中にも鶴岳乃宮は松柏乃みとり
いよいよ志かえて蘋蘩のそなへかならず[illegible]なし
法施を定めて四季の祭礼楽をとことし職掌

よ給く八月の放生会をおこなはる。宗旨の
いはしみづ社よりうつし給ふ由。二階堂は
こゝろをうつされし寺なり。鳳凰の甍日に輝
き。亀の瑞雲によりて。楼臺の荘厳なる
ありさまく。林池のあとにのこりて。翠は
みどりにして大御堂といふは。石巌
のうへにたかくたてられて。道場のあしたゆふべの鐘
のこゑ。禅僧居をすみ。明月との伴
ひて紙窓の観経をつとひ法座をおこなふ
ところありて金磬のひゞきをさそふ。表は故
なし給代々の将軍参下のあそびけるなる。

松の社蓮花寺ありしはこれ也かりし。東がしの細
ともにまよ。阿弥陀仏の丈六の像なりよ
しかるを人あつまり。やうやくいきほひ盛りた
まさたりとくあるいはその念の尊
あつまりぬ。本は蓮花寺の人。定覚上人と云更
のあつまり。三井延応の比より。関東の
いやしくとすゝめて。仏像をつくり堂舎を
建立ありては功もそへりこゝに二十年をすゝみ。
高堂たかくあらはれて天のやどりにいたる。
白毫あきらかにみかきて。満月の光をてらす
やう此。仏をもつて西三年乃功をとげやう

またなりし。堂ハまさに十二楼のかまへをなじう
たうし。故東大寺のたぐひハ聖武天皇の製
作。金銅十六丈の盧舎那仏なり。天竺
震旦にもきこへざる仏像とこそうけ給
比叡の峯を八丈の風長かれたる。故大仏のかうく
しかるをすゝめなし。金銅千像のうつりゆくをそのうれ
ひも末代よりて、これを不思議といひつ。尼
し。弘法東漸の御よあがりて、権現力をそへ
かうしてあまたゞて、まかゆかりなどてありえ
こゝみもかるこれと海にすゝいさゝれとも。ふ
さかえるくなく武にかけくはふよすべ

へき須磨もわたりし須磨をしり見さだれハ、見渡
まかりハ、都の事をおもひきえ海へさたかにゝ
む。しかもむかしくゐたりて秋も悲にしたかひ。
蘇武が漢とおなじく十九年の猿鞭。李陵が胡
国にしばし三千里の道を思ひ。身をおくる
らく須磨関なかれ。しばしの音をやはらかに
こ。松吹岸の風のそよぎにもきをしてなか
まされる。懐古の心ぞ今にありかたれてなか
つと都のこゝろなどかやる。折しも一切の一滴
このね空をよ消ゆくも哀なり
かへる面いたるこれがむじの一滴をも

なくさそや絃のたえしめり
うたかたに神無月の廿日あまりの比ほ
らさならとのまゝありて都へかへるさ
よすからねざめてたれかれのあとゝめ
うきかりしゆうし縁となるさへいかにしけりの
そむかぬよりあとわれとも古へに帰るへし
たゞ朱買臣にあらぬみちなれとも
あつしへの人の山から衣来りけり
かゝるおなかの縁をもやいひし
十月廿三日のあかつきにすゝむる絹金をとゝのへく
みやこへおもむくとき宿の障子に書付

あはれまことに数といふくもすゝきあはれと
されかるかのみよしのやまのすゑ

斧柯序

源通光

昔九重のうちに教すゝきしかとも人すみく
くさよしつらし程くいかゝつるに年とうきすく
那波の浦にやく塩のからくもやすきと歌
よそにきりとあはれ年月あはれはかりの雪の
積りけると飲みて鏡の影にかはるさいかうさ
こりしくゝ玉ふ年をかれたれた風乃
音やいかに寒きそしはさら移りて。

永よ春日いつしかと言しかく見えて侍るに。
谷は常磐しげけれど、西面乃所に影うつる
まさとゆゑつゝすくも、物よりふかく見やれこそ。
ひとりありける身乃すゞしからんかきて。
流れくと昔今のよりいつゞゆくこゝろかの松
ともしは友なりける事とあすく打しも。
庭は浅茅くとふくる人はり。龍なすらんと見
ましきや乃上とて、なりの身にしめ名はゆらこゝら次
見んなりれきふつゝすくもそれ門志は滝
ありけるかりうちく、甚事にもつてかゝら海雨
しし、斧のえても朽ぬれしさまくも見にたへ給ふ。

よしあしと思ひわきて侍るに、和哥のうら浪
拾ひあつめりけるを、すゞろにひかりかきつ、かね
なまじひにも気をと夜まであかし言しつゞけて。
古き歌はうしともこり数しらすまゝ。
古今集乃序に六人たちなる所乃見て給
とみつゝもとく、古き事何とも捨られ中々。
此ずりいふそありいらせんと見所あらく給
うぬ、今は世にいかくれなるほつさ人とくれしやと
ところ。歌人云世をつる人まへつく、前乃むかし
まさ昔よりあるさなり。然れやりや山邊の
浪ぞし、ある柿本乃麿つらしして昔おもひけ

あまたはおほく御らんじける中にもとくれて
ゆふべにかはらむもの秋の夜の月は定家の
おもしろくてつねよりもまさりていかに見えける
こや源氏物語をおもひよれる人も御らん
竹の園生の門まではげに侍りけるにも
まことに月のかはらぬ雲の道より歌とて
なかなか露の袖涙とおもひあはせしよの
さしあたりて十七八人かけりけるをいへば
左右見えてこころえいひおもしろくさりて見えたる
いろこそゆかしありけることをりおりいはむとなつ
将すすりにかくうち見て月もあれとあたりの空も　さ

ねさめの日ハいひしに山寺に日暮れてとりとま
りぬべく帰りけるにいかにもすこしいたく見えて十
日ばかりにもなりけりとて秋の夕ぐれなり
めづらしくうれしくこれもうれしきも数ハ
御覧じく物をおもひ御らし見くらべ御ため
ま此とのやしきしはしばしことと云人の言
ふくし見て万葉集を御らんしてこそ聞きたる
御ものハいひちうしくもりとも人ありけるとも多く
見て御らんハ見えるにもおほかたに女ハ歌よみとぞ
いつしかつらき御ことはあまた八十首よみけれども
はかなく御けり義理とも見えてはかなきものにありける

よそに猶よしめやかなれ。文字の数しそ恨不足し
まにしめやかなしむ。思ひとられ程なり。光てある
人はよられたれとも多く御なり。入られ人こそとりて
もくらあるをひの言をとは猶くはしてなれ歌
を入りてもとゆる事をも御なり。かたく海
しくみて御をいはしてもそらいふこと御見
かりこらる事をいふ。思ひしく月よりまにと
御りね

七十番歌合跋

抑三笠山乃あるしは志古代もと御事六十氏
藤原光俊

河乃浪はなかりせしとを此みぞ今ともとまつりまさ
はみしとはりてかりりくはとはめ跋をとしく
とわさるまりし事すしこのにとも。いかりつとも
もし今をもみんなあさせ給ひしく。歌合はこと
あり。是を程云衛門乃戯なるのこよりあ
ら須。彼長保大江匡衡と争ひ。秀逸と七
拾らの義とはひ勝判と七かちの乳り
ぜしともあり。あさりのその絶てふ両月をちらせて
ひすくは嘲哢なりし。しもへかくてもの浪
まこえあふされそ随をうへしといふてにた
しかやすなはりひ老の今にもちえむして。

跡のこしたくよのやし、ありさまは傍らにありからに
を延定め給ふらんて、部類のゆかしさまて
からく、題をあらはしきこしゆるされいふ
備せのいろみたさいひて、波磨浦にすよ
むかそれよつらん、珠玉の篇をなしたる、
鴻鵠になさんとすらむ、積珠の詞と
宣しことは、藻湛の情をあらはしね
深からんし、他の者あらはれ給ふ狭きを
よそも褒もて、返せんよそもあしからん故
を温て新よりあかれそ、うれしくて集
河のふるき、和すに取いたりて残給ふへし。

此ほとをありて、ほとつたへ積れの日数をとそ
かきは二の六ヶ月をひけるゆへ、早くもさんなし
もれとも、むかしは眠をかへし、恵むともしれた
身ハ病しもとなるより、巧みして遅きま
とあらはれなく、ほとすくして速うれもあ
されく、ところ所いよくなんそれよの
うたかはれたよのとや

江長歌合序

前東高家

大和歌を乱まつ乃花にたくひて、やしき
家になりまさて、後ハ、くさ高に月乃嫉

志かれし雖ねよおかくつりてあそひ物なりき
又、おもきよりく道と深くまさまん知れる。
若此赤人人まろのすくひより、をとは乃宝家
家隆よ定家まで雅経津よ至おくふらくさ
あしらかれみつゆとひろひはくえ山よなを入く。
志けるえ林の一枝をとれは、すくてあのた
の事人のんまらくなれ故ゆ海あやせ
見えくも底とこしくは、山ありとゆてもお
くと志うさる案は、やさうかるかる流とめれてよ
志つくれよえう雅まく、やすく道り入おひ
をかしつて、身放ゆる世れ孝くひ抑はくとは

むべ、あしくに松山りくて知れあし末されは
こゝうしよかくて、神代の雲は雲い詠はかく
たりし物なり、志つくあまとも東ちの壺さ
山風世とおひし、和哥めうしれ浪さりの月
道をそくをる折たまし、開の東のうしこさ
くしはくをとけて知のうちよ集説記をる
こゝをあり列ひける法人の教をさくよ説知
哥をえ、よ前をつゝふ歴てさよりめり、志つり覚
をいるひゆへい、顕くまさすれなきを志ひ、かく
れある恨りるめくし、又してまりほよりく
明かくく未得謂得、未證謂證の罪もかされる

庵されたゝ題に凝滞はゝられを進ひ。
軽蔑の心をりし次にすゑ申ありたるひまな
すくなく。各の此一字味ひ知する心撰は。
卅六人とと名はあてたりくれとも。前大納言
為任てさゝし始たるより已にすゑひろくなれ
まれわさたすれつゝし。情とのいさかひと何ひ
見ゆるをいはゝ。てもとのかはゆく営まる中
に。一番左の歌すはいひしらず。猶ゆる次
ゝさ嬉のますひかに恥ぢる所ありかれ斧の
山風高くして。細の花八雲の道と流すへ。
葉の花露ようわらくなの文むくさの木を

むかしへつま。宴ようしこかりし代々のあとよ
おくくはすつらする先老のはしめあたましへはる
ことはりめて道のやはらきすくなかりし。身の
癖なるも流れさ侍り舞かはい家のかう見
歌あまたとし。一巻のさく申せ塵にくもりて。
うらみもなく法道くもれたゝ。六十の歯
すひつり深したとひふりかしとわさ
をとかくむとふしも空りあくこする憾を
同ひられ羅の扎へし。于時弘長二年な
ゝ月の比筆を染てこれを記しとつれて

貞治歌合跋

同

抑二代撰者の沙汰とふかきよしみ一旦判者
の名残けかし侍ることかたくのかれやせん。
甚恐誠ありしゆへ、然は浮しつゝあ侍りまゝ、
此道ニ入ことへ深く浅く拙きへ侍るよ、殊に庭つ
程へ此所なく、頻ようしきむる詠歌あり
ぞとはやへきてのし、今も批評をのくてきて家小
清れく、見及思ひおほせれて候、莫く筆まよ
ますせて書付侍り、清ことさ例ともおのづから
心ありおもひて、いさと残てもかてぬくゝあくい
侍らん。窓へをそうく清石をそうし家へ清恥ん。

さらに遁れへきふからすはまでと、愚かなる
を用らうし世のそしめ、おそれあこの孫ていかて
かくまことに侍るへきこのころすゝみ志り拙き
くをときえ侍り、いよくよしあしきまえ泥侍
まやをもだす時よわたまる、勅をまつれるを
もちて、壊乃日のあさんらなども侍りきさる
庭し、いまへり此石をも学へるこゝとうらまず
又こゝろ残りきまぬ人侍りて、難波津の波
そもしのたゝしきかつり浅香山の
たいいあしへんうるしきみをも为へきよし
残まつるよ身よおりへ清所、なをのつゝ人小

をもよふしはへんかな也

古今著聞集跋

橘成季

この集の起りは、たゞそのかみ詩哥管絃の
みちぐに、時にとりて優なる物語
を集めて、絵よりうつさむかためなりしく。
いにしへの物語をきゝしにしより、浅茅か
末葉なさけもいそぎすてひろく勤へは
まづく記すわ侍り。他書物ゞりきとを
よしひてたまこ〳〵徳もそては書集しれ侍よ。
夜野の草ともしきく。森はおちま數也

ひ侍りにも、古きを捨てたりしくなまさてとゝ継
しきる者しも、古へよりは事をおしき
しきこともしきをきく時もすいさすれの物ぞさ
をもふなさけのまゝ侍べき。たゞ小
より成るくは記録などひ一代
きくの情絶をのはぬ。しこのをかしを
を浮は花ゆたさとの語しひ。わきまふる
おなはでふ思乃かしひかれまそでさて小
閑院てゐしるくまいとも古き残せあへさ
さまへくゞ古わすもたしうふるしも海
しま侍るのしはのよ記をもうち巻数

さしめく、此篇二十巻とし、次ゝ篇のちしゆく
小説もののさとりをつへて、つまくよ
その物かたりをあらはせり、建長六年十月
十六日をはりぬ、寓ゐ準ゑく諸寺管絃
の専はよのかすめ、則い啓集枝ミ乃道より
れこまるりよりまく、白楽天人丸廣成武
乃書記をのけて、甚前くりゑくの性抱も
我ゆく、文酒脯菜菓此奠坊ゆつくまろ席
くりたちし、然くく二十篇のそへしつまさ弁物以て
一限をよあんあく、次よいてたきのよ忠坊かく
せく、呂律入曲を唱ふ、次よ詩くを講を懸ふ云。

多末文學家一字次よ和歌を講まを懸よ云。
翔游萬夕蔡藥、寄鶴祝、よのく枝藻平
て朗詠あり、嘉暦令月次よ春山不讓土壤、
次り今生世俗書句未也、帝これあれと
出次人くしまとして次長式ミケ此郢曲の
ん後して、竟宴此よ勇縁也とさるゑのたり、
次よ一獻の盃をとらむ、二獻よ署をさん、
三獻よ又郢曲あり、そのゝち數獻よなよふ、
各の歡渊わきをたんとして人く旋坊さん、
今多年收拾の功を遂て、一部竟宴此儀
といろん、今日此緯をあさしれゆくてしろたり。

扶桑拾葉集巻第十一終

淺草文庫
日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan